

えどがわく お た 江戸川区の生い立ち

古代

江戸川区は昔、海の底でした。約3000年前頃から、海はゆっくりと後退していき、地盤の隆起や川が土砂を運んで陸地化が進みました。

また、上小岩遺跡から土師器はじきが見つかっており、約1700年前の古墳時代前期にはこの一帯が人々の生活領域であったことがわかっています。

正倉院しょうそういんにある養老5年(721)の戸籍によると、葛飾郡には甲和里こうわり、仲村里なかむらり、嶋俣里しままたりの三つの里りがあったことが記録されており、この「甲和里」は小岩のことではないかと言われていています。甲和里には454人が住んでいました。

中世

平安時代の末頃から鎌倉時代にかけて、この地域は葛西氏が治めていました。葛西氏は葛西33郷ごう(江戸川区、葛飾区ほか)を伊勢神宮に寄進しました。これを葛西御厨みくりやとよみました。戦国時代には北条氏対里見氏ほうじょう さとみ こうのだいかつせんの国府台合戦の戦場となりました。北条氏が勝ち、以後北条氏は秀吉に滅ぼされるまで関東を支配しました。

近世

家康が関東へ来て江戸の城下町づくりが始まると本区はほとんどが幕府領となり、新田開発も盛んに行われました。

特に宇田川喜兵衛うだがわきへえによる宇喜新田(宇喜田)、篠原伊予しのはらいよによる伊予新田(伊予田)、田島図書たじまずしよによる一之江新田いちのえがよく知られています。



江戸時代の主な街道と関所・渡し場

江戸時代は区内に、元佐倉道^{もとさくらみち}、岩槻道^{いわつきみち}、行徳道^{ぎょうとくみち}などが通っていたため旅人でにぎわい、また、江戸川や新川^{しんかわ}は荷物や旅客を乗せて往来する舟でにぎわいました。

近代

明治時代に入って近代日本の歩みと共に本区も次第に変わりました。

江戸時代の36ヵ村は、南葛飾郡に属して10ヵ村に統合されました。総武線の開通など交通機関の発展とともに人口も少しずつ増えてきました。

昭和7年には東京市と周辺5郡が合併し東京35区が誕生しました。この地域では3町4村が合併し、人口10万人の「江戸川区」が誕生しています。

太平洋戦争では昭和20年3月の大空襲で平井小松川地区が焼失するなど大きな被害を受けました。

現代

昭和30年代からの日本経済の高度成長に伴い、地下鉄東西線の開通などで区の人口も急増しました。その後、区は長期計画や土地区画整理事業の推進など積極的な施策を展開し、近代的な都市へとめざましい発展を遂げました。生活環境の整備も進み、親水公園や臨海公園、文化施設や大型スポーツ施設などが次々とつくられました。さらに、福祉・健康の充実や安全・安心な「まちづくり」に一層の努力をしています。



葛西地区の街並み

江戸川区郷土資料室

〒132-0031 東京都江戸川区松島 1-38-1 グリーンパレス 3階
TEL : 03-5662-7176 (9:00~17:00)